

魔刃

秋ノ原春助

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

「世界は俺達を選んだ」

突如として発生した連続殺人

それは世界各地で同時多発して起こっている不可解な事件であった

犯人は以前は会社に務める男性や主婦、子供などどれも共通点がなく事件は行き止まりと思えたがそこに立っていたのは――

目次

静寂の刃

1

紅蓮の双眸

7

静寂の刃

信号が変わるのをやめ、ただ赤色の光が点灯し、静寂が支配する時間

その静寂を撃ち破るが如く、複数の発砲音が響きわたっていた

「ヴあ、ががい、があヴィ」

言葉を知らぬ生物がいくつもの銃弾に被弾しながらもなおスピードを落とさず追隨する

「来るなよ！ バケモンがああっつ！」

銃弾をさらに消費しカランカランと銃創がむなしく音を立てるたてるが状況は何も変わらずむしろ悪化していく

恐怖で足がすくみ逃げるできない

必死に心の中で助けてと叫ぶが誰もそれに応答せず、恐怖は目の前まで接近する

ニヤリと口元を緩めた姿はまさしく化物のそれだった

体からどろりと血を流している手で男の頭を掴むとグルリと真後ろを向かせるよう

回転させる

男は糸を失った人形のようにだらりと力を無くし目を白目にして倒れた

「ぎひつひひぎゃぎゃぎゃ」

玩具で遊ぶ子供のようにな化物はその後男の身体を弄り回し朝になると――

「四肢をもがれて頭が潰れてやがる」

酷い、と述べ死体をブルーシートで覆い合掌する

死体があつた場所にはkeep outと書かれたビニールが貼られ事件現場は封鎖されている

その近くには何台ものパトカーが駐車されており、緊迫感がそこにはあつた

『殺刃』（さつじん）の仕業だな……………」

これで何件目だ……………」

悪態をこぼすこの男性は土野剛三郎（ひじの こうざぶろう）、警官になりすでに20年が経つ大ベテランだ

そのベテランは不可解な事件を目の当たりにする

それは刃物のような物でバラバラ殺人をするというものだ

ただ、それならば不謹慎ではあるが普通といえよう

不可解な部分とは世界中でそのような事件が多発しているのだ

当初は同時多発テロだと思われたがその考えはすぐに消えることとなる

なぜなら殺人を犯した者は一日前まで普通に会社に勤務していた者や主婦、または子

供、最近では政治家までもが殺人に手を染めている

殺人者たちはある点を除いて共通点は全くなく、普通の一般人であった

「うっ、どうしてこんなエグイことが出来るんですか」

声をかけてきたのは先日、剛三郎の部署に派遣された新人の春川秋優（はるかわけきひろ）である

秋優は警察学校を主席で卒業した為か論理的な思考を好み、足で稼ぐなどの昭和を匂わせる行動は嫌うが、熱い情熱を秘めたところを剛三郎は気に入っている

「おう、秋優。お前は『殺刃』のことをどう思う。なんの目的で人をバラバラにすると思うよ」

「……………そうですね。犯人は昨日までは何の以上も見られない一般人でだと資料にはありましたし、バラバラにすることが目的だとするならば単なる悦楽としか考えられませんか」

「ふん、私利私欲で殺人か……………物騒な世の中になったもんだ」

「剛三郎さん、さつきさつじんとか名づけてましたけれどなんですかそれ？」

「おう、『殺刃』な。絶対に刃物で人を殺すからよ。殺す刃物と書いて『殺刃』だ」

「安直ですね」

「事件は安直な方がいいんだよ。変に考えて頭に残ったらどーすんだ」

たたた、と若い警官が近づき報告する

「警部、やはり鉋物以外新しい物は何も残ってはいませんでした」

「やっぱりか……………」

ふと剛三郎は殺人現場をみやる

するとそこには太陽の光を反射する銀色の鉋物があった

「いつも事件現場にありますよね。その鉋物」

「ああ、何なのか分かんねえ新しい鉋物だよ。科捜研は騒いでたぜ」

「解析はおそらくもつとかかるでしょうね」

「かつ、こんなものを調べたって犯人は特定出来ねえのによ」

「分かりませんよ。もしかしたらこれが何か手がかりになるかも」

「そんな可能性信じるなら聞き込み調査でもした方がまだ」

「足で稼ぐ、ですか？」

「そおだよ。お前の大つきらいな昭和を匂わせる行動だ」

ニヒルに笑う剛三郎は事件現場から離れ秋優と共に近辺の聞き込み調査を行なった

—午後五時過ぎ

「はあ、やっぱり何も目ぼしい情報は無かったですね」

「バカ野郎、こんぐらいで音をあげるやつがどこにいる」

「こんぐらいって『殺刃』の事件に関わってこれで34回目ですよ。このうちで得られた新しい情報なんてひとつもなかったじゃないですか」

「んなすぐに情報が舞い込んでくるかよ。果報は寝て待ってっていうだろ」

「僕は寝ずに日々歩いてますけどね」

「戯言はいーんだよ。ほら飯にすつぞ飯に」

剛三郎は聞き込み調査の後には決まって居酒屋に連れていく

それは秋優への労いの証だった

「だと思いたい」

「おらあ！ 飲め飲め、秋優！ お前は24になつても結婚してないとはどういうことだ。お前には男らしさが足りねえんだ。ほら飲め！ 一升瓶は飲め!!」

「無茶言わないで下さいよ！ それだけ飲めばアル中になつてしまいますよ」

剛三郎はいつものごとく酒に溺れ、こうやって秋優に絡んでくるのだ

顔を真っ赤にした剛三郎は呂律が回らないのかだんだん言っていることが分からなくなつてくる

「だきやらなあ、そういいやつはだなああ、ぶつとばすういいい」

呂律が回らないということは今回も秋優が家まで送らなければならぬという合図

であり、その度に秋優は溜息を漏らすのであった

「……………部署を変えたい」

居酒屋で精算を終えタクシーを不運にも捕まえられなかった秋優は仕方なく肩を貸しながら剛三郎の千鳥足を支えて帰路についていた

「へへっ、すまねえな。秋優」

「そう思うのなら次からは飲みすぎないで下さい」

「善処する」

「その言葉は35回聞きました」

「へへへ、ん?……………止まれ秋優」

急に真面目な声音で話す剛三郎に驚き反射的に足を止めた

「どうしたんですか、急に真面目になつて」

「前を良く見ろ。アイツ人間か?」

剛三郎に向けていた視線を向けるとそこには、紅い眼光を走られながら両腕から液体をこぼす何かが立っていた

紅蓮の双眸

暗闇の中でゆらゆらと蠢く紅い双眸は確実に秋優を捉えていた

服装はかろうじてスカートが見えたので女装趣味の変態野郎でなければ女性だと判断できる

「あの女性何をしてるんですかね」

小声で剛三郎に問いかけるも返事が帰ってこない

「剛三郎さん？——っ！」

見ると剛三郎の眼は捜査をするときの鋭い眼光を放っており、目の前の女性がただの一般人でないことを物語っていた

不意に剛三郎は問いかける

「秋優よお、何か武器とかは持つてないか？」

「武器なんてありませんよ。拳銃は署に置いてきましたし、あるとしてもボールペンぐらいです」

「ハッ、拳だけで化物と闘えなんて無茶だな」

剛三郎はクイツとネクタイを緩め、羽織っていた上着を脱ぎ捨て構えた

「何してるんですか。剛三郎さん。女性相手に構えなんかとって」

「ああ、アイツは恐らく『殺刃』だよ。しかもさつき誰かを殺したばかりのな」
だから両手にあれだけの『血』がついてる

と剛三郎は淡々と述べる

両手から流れてる液体は血液だと断言したのだ

しかし、そこに疑問が浮かぶ

『殺刃』は人間の四肢を切り落とすほどの切れ味のある刃物を持っているはずだ

しかし、今の女性の両手には獲物の影は見えない

「とか思ってたら秋優。メガネを外してよく見てみる。お前ならはつきりと見えるはずだ」

言われたとおり眼鏡を外し女性の手の部分を凝視するとそこには――
「っ!?!」

確かに獲物は無かった、女性は刃物を持ってはいなかったが、『手が刃物になっていった』

五指が塊となって金属特有の光を放ち、刃は肘のところまで届いていた

あれが人間の成せる技だろうか、いや出来ない、出来る筈がない

じゃああの女性は何だ

—分らない

あの刃物はなんだ

—判らない

紅い眼光は何を意味する

—解らない

どうすればいい

—逃げるしかない

「剛三郎さん、逃げましょう。警官だからって正体不明の生物に立ち向かわなくてもいいはずです」

一刻も早くここを離れたい。その一心の言葉が早口で紡ぎだす。しかし

「そおだな、俺もそうしたいがどうやらアチラさんはそうさせてはくれないみたいだぜ」

世界は優しくなかった

まるで魂が抜けたように棒のように立っていた女性が体を左右に揺らし、時にクツクツと不気味な笑い声をあげていた

紅い眼光がその度に軌跡を描く

—あれは危険だ

わかっている、でも逃げられる雰囲気ではない

—ヤツは確実に仕留めに来るはずだ

ジャリッ、ジャリッ

「秋優、頼むぜお前の『眼』が頼りだ」

「……………了解です」

ダンッ！

コンクリートにヒビを刻み込み、ヤツはこちらに向かつてきた

速い!?

けど—

世界が変わる、同じ風景、同じ時間、同じ視点

しかし、感覚は違う

俺には全てがスローモーションに見える

ヤツが土を蹴ってから数秒で音が聴こえる

タアアアアンツツ、タアアアアンツツ

右か左か……………

赤い双眸との距離が5mまでになる

右、いや左……………

4

3

2

……………下！

「剛三郎さん跳んでください!!」

上へ跳んだ瞬間、刃が靴底をかする

見ると紅い双眸はかっと見開かれていた

「驚いただろう？うちの期待の新人はちよつと変わってるんでな！」

秋優の胸に仕舞っていたボールペンをすかさず取り出し紅眼を貫く

「うぎいいいいあああああつ!!」

「ちつ、跳びながら刺したせいで狙いが定まらなかった。恐らくそんなに深くは刺さっていないはずだ。なら、襲われないうちに逃げるぞ！」

「……………は、はい！」

「うぎいいいいいいいいいっつ!!」

後ろに断末魔を残し秋優達は闇の中にへと沈みこんでいった

「はあ、はあ、はあ……………ふう、ここまですれば大丈夫だろうよ」

額の汗をぬぐい剛三郎はニカッと笑った

襲撃現場から歩けば40分はかかるであろう空き地まで逃げてきた

「はあ、はあ……………ひとついいですか？」

「なんだよ？」

「あんたは誰だ？」

息切れの声、肩が息する音がすべてが消え静寂が訪れる

静寂を破ったのは剛三郎、いや誰かの笑い声だった

「ははははははっひひひひひひ!!」

「……………」

手で顔を隠しなおも笑い続けるそれは満足したのか顔をあげて秋優を見つめた

「どこで気付いた？」

「確信がついたのは今さっき、お前が化物の眼をボールペンで突き刺したところだ」

「くくつ、そおだなあ、あれは俺もやり過ぎたと思つたよ。なんてつたつて、お前の懐からボールペンを抜いて眼を刺すなんて普通じゃできねえもんな」

「俺が確信を持ったところはそこじゃない」

「かかつ、なんだよ。言ってみろよ」

「躊躇なく眼を刺したことだ。普通の人は躊躇なくそんなことは出来ない。反撃するとしても殴るか蹴るぐらいいしからない」

「ほお、面白いな。んで俺が剛三郎じゃないことに気付いたのは何でだよ」

「簡単だ。お前に『血』が見えたことがおかしかったんだ」

あの暗闇の中、僅かな灯りがあったところで血が流れているとどうして分かるだろうか

ならどうして見えたか。答えは簡単だ

俺と『同じ』――

「怪物だからだ」

「くくつ、いいねえ、合格。100点、花まるだよ。歓迎するぜ」

我が同士よ

そう言いながら差し伸べる手を――

切断した